
学園刀争記

kooo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園刀争記

【Nコード】

N5282Y

【作者名】

k o o o

【あらすじ】

この世の全ての人間が持つ神宿る武器『神器』。ここでは弱肉強食が当たり前で常に人は誰かと争っている。

総生徒数が二十万人も在籍する戦場ヶ原学園に通う十見十兵衛は、そんな世界の中で神器をつかわず平和に過ごしたいと思っていた。

十兵衛と椿姫と真

人生なんてオギヤアと産声をあげる前から、数億の生命が己の存在をかけて一つを勝ち取る優勝劣敗、適者生存からはじまり、下界へと旅立てば生存競争、弱肉強食が待ち受けているってもんだ。

そんな世界に生まれおちて十五年。いま俺は戦場のただ中にいる。

「十兵衛、ご飯まだ！？ 会社に遅刻するじゃないの」

「飯くらい自分でよそえよ！」

「お兄ちゃん！ 私の下着は洗わないでって言ったでしょ！ きもいつの！」

「お前が自分で洗わないからだろ。いつまでも洗濯カゴに入れっぱなしの方がきもいわ」

そう。俺はいま戦場のただ中にいる。

平日朝の時間をそう例えても、世の主婦業をなされている方からはきつと賛同の意を得ることだろう。

年頃男子学生の俺にとって一分でも長く眠っていたい睡眠時間を切り上げ、低血圧で絶対に早起きなんかない母親に変わり炊事洗濯、さらに自分自身の身支度から食費を浮かすための弁当作りなど、朝の時間はいくらあっても足りやしない。

しかも、今日は俺が寝坊したため、トーストにハムエッグで済ませようとしていたなか、無理矢理起こした母親から、

「朝食は米粒からでしょう」

ダメ出しをくらった俺は冷凍ご飯を温めようとすると、すかさずスリッパが飛んでくる始末。

このクソ忙しい中キッチンを動き回る俺の手伝いもせず、母親は

起き抜けからダイニングテーブルに座ると飯が出てくるまで一切動こうとしない。まったく我俤な母親のために、俺の貴重な時間がさらに消費されていくのは腹立たしい。

自称周りからは二十代ですかって言われるの、とのたまう寝ぼけ面した四十歳の母親と、その血を色濃く受け継ぎ、お兄ちゃん手伝おうか、などという言葉を決してその口から漏れ出すことのない妹の小夜子が口を開けば、今日の朝食は手抜きだの何だのと悪態をついてくるのが俺の日常だ。

俺自身はトーストをくわえながら洗濯カゴを抱えてベランダに洗濯物を干しているというのに。

これだ。これが弱肉強食の世界。

組織を形成する生物界には全てにおいて序列というものが存在し、我が家の序列は母を筆頭に留学した姉、妹、俺、父という順位づけが形成されている。

力ある者が弱者に対して強い態度を示すのは犬だろうが人間だろうが同じなのだ。

ここでは俺と同格の父も本来なら朝の戦場で一緒に家事をしているはずなのだが、彼は俺に向かって、今まで見せたことのない笑顔と台詞を置いて旅立っていった。

「息子よ、父は愛する家族のため単身赴任することになった。あとこのことは任せたぞ！」

今でも父の嬉々とした顔を忘れることが出来そうもない。

登校準備を終えて、学生服に身を包む頃にはデジタル時計は八時を示し、いつもはまだ大丈夫と軽い気持ちで構えているのだが、今日に限って言えば絶対に遅刻をするわけにはいかない。

先週発売した人気ゲームに没頭してしまった俺は、今日遅刻してしまうと十回連続遅刻となる。

それがかなりまずい。

この時間に家を出れば、徒歩十五分近くの戦場ヶ原学園までは余裕で間に合う。

普段遅刻ギリギリまで家事をしている俺にとって、この時間に登校することは非常に希で、その時間に登校している妹と久々に時間がかぶった。

珍しく玄関で一緒になったいつもは会話らしき会話もない妹から久々に投げられた言葉のキャッチボールは、

「ちよつとお、一緒に出る気？ やめてよ。兄妹だと思われるじゃない。時間ずらしてよ」

絶対にキャッチ出来ないような方角に向けて投げつけられた。

お兄ちゃん一緒に学校行こう、なんて言葉を期待するわけじゃないが、可愛いくてお兄ちゃん大好き、なんて言う妹なんてこの世にいやしないんだ。

言われたら言われたで気持ち悪いけどさ。

小夜子の言うことなんぞ聞く気がサラサラない俺は争うように玄関の扉を開けようとしたとき、ようやく目が冴えたのか少なくとも三十代前半には見える顔になった母親が、

「十兵衛、忘れ物」

軽々と二つの黒い物体を投げ渡してくる。物体の長さは一尺五寸、重さにして六百グラム前後の小太刀が二本。

真っ黒な小太刀二本を受け取ると『小太刀』から少し甲高い苦情の声が上がる。

『アフオーアフオー、十兵衛のアフオー。神器を忘れるとは戦場に

裸で出陣するようなものだカァ」

『まったくだチュン。我ら無しでどうやって世上を渡り歩くんだったチュン』

「悪かったよ。うっかりしてたただけだ」

さえずる二本の小太刀をさすると、腰の後ろにある専用のホルダーにセットし、すでに小夜子が開け放っていた玄關を抜けて外に出る。

これが俺の神器、『闇鴉』と『黒雀』だ。

人は敷居をまたげば 七人の敵あり。

家から一步外にできれば競争社会が待っている。

漫画や小説などの入賞争いからスポーツの勝敗、受験という名の学力闘争、会社員であれば他社企業とのプレゼン合戦、意中の人を得るための恋愛戦争等々。書き出せばキリがないほど世の中は勝負だらけの世界だ。

弱肉強食の世界は生物界の理だけでなく、いやま人間社会の鉄則だ。

それ故にこの世界では子供が生まれるとその子にふさわしい、もしくは立派に育って欲しいという願いを込めて武具を贈る。

その武具は飾りやお守り代わりではなく、大往生するその日まで身につけ、刻には己の活路を開き、刻には家族を守る。そして、いつかしか神が宿る『神器』という存在となるのだ。

俺だけではなく、両親も持っているし、妹の小夜子も薙刀を担いで登校している。

街を軽く見渡せば学生や主婦、OL、サラリーマンからご老人まで全ての人が何かしらの神器を身につけているはずだ。

二十八階建てのマンション最上階に位置する自宅から共用廊下を通りぬけ、エレベーターホールまで来ると俺には決して向けられる

ことのない、小夜子の可愛らしい朝の挨拶が聞こえてきた。

「姉姉！ おっはよー！」

朝のこの時間は混んでいるのか四基あるエレベーターは未だに到着しておらず、少し広めのエントランスには出勤前のサラリーマンや学生が数人ほどいた。

その中でもひととき異彩を放っているのは、俺とほぼ同じくらいの百七十センチという身長に抜群のスタイル、背景にこの世の美しい花々を飾り立てても見合わないほどの黒髪美少女がいることだ。

神導椿姫。

椿姫と書いてツバキと読ませるのだが、彼女を慕う人間は『姫』と呼ぶ。

久々にこの時間に会った日の光も眩しい椿姫のブレザー姿は、きつちりと胸元を締めていても隠しきれない胸の膨らみが俺の視線を虜にしている。

どうやら去年見たときよりも確実に増しているようだ。

そんな俺の視線に気がついたのか彼女は胸元に手をあて隠すと、

「胸見すぎ」

『おぬし相変わらずスケベじやの』

照れくさそうに言う表情はすこし垂れ気味の目元に左の泣き黒子特徴的で、学園に隠れファンが二万人はいると噂がたつほどだ。

そして、俺をスケベ呼ばわりしたのは椿姫の腰元で紅漆仕立ての赤鞘が美しい三尺あまりの長刀、彼女の神器『赤鈴』。

他人の神器は主以外の人間に滅多に語りかけることはない。

あるとすれば、家族や長い時間をとにした親しい人間に限られている。

小さい頃からお隣だった神導家とは当然ながらも顔なじみで、同い年の椿姫とはこれまた当然のごとく幼なじみという間柄なのだが、世間一般が期待するような毎朝一緒に登校したり、実は俺のことが好きだったり、ツンでデレたりするような淡い期待を抱けるような間柄ではない。

優良生徒の代表格とも言える椿姫と万年問題児の俺とでは生活のリズムも違い、中学に入ると自然と会話も会う機会も少なくなる思春期特有の見えざる壁が二人の仲を邪魔している。

「うす。珍しく遅いな」

「おはよ十兵衛。今朝は生徒会がないのよ」

「朝から変態行動やめてくれない？ てか死んでくれない？ いますぐ飛び降りて」

舌打ちしながらものすごい目つきをこちらに向けてくる小夜子を無視し、隣に立つ椿姫にむけて一応の挨拶を交わす。

俺と小夜子のやり取りをみて椿姫が苦笑すると、彼女の腰元からチリンと鈴の音が鳴った。

椿姫の赤鈴は鞘から何の変哲もない小さな赤い鈴を釣り下げ、その鈴の音は椿姫が全力で走ったとしても鳴ることはなく、彼女がたまに見せる普通の女の子でいるときだけ鈴の音が鳴るのだ。

椿姫との微妙な距離感を残念に思っていたが、鈴が鳴るってことは、まだ自然体で接してもらえているようで、俺は少し嬉しくなる。

久々に椿姫の登校時間に力チ合ったこの機会を大いに生かしたいのだが、まず小さな壁として俺と椿姫の間で決して会話をさせようとしてない小夜子が邪魔すぎてしょうがない。

こいつ消えてくれないかな。

「朝に会うのは久々だな」

「そうね、中学の卒業式以来かしら」

「うっせ、姉姉に話しかけるんじゃないよ」

「んじゃ、一月ぶりか。最近は話す機会も少なくなったしな」

「私が生徒会に入った辺りで生活のリズムが合わなくなったからね」

「おい、シカトしてるんじゃないよ！ 私の頭越しで会話するな」

まったくいつからこんなに口の悪い子に育ったのか。確実に母親の影響だろうけど。

ちびっこ小夜子の頭越しに会話をしていたのが相当気に入らなかったのか、ようやく到着したエレベーターに乗ろうと一歩前にでたのと、俺の顎めがけて下方から薙刀の柄が襲ってきたのは同時だった。

とっさに体をひねって後方に躲し、体勢を整えた俺が見たものは、俺以外の住人が乗り込むエレベーターと必死に閉じるボタンを連打している小夜子だった。

「あ、おい！ 俺も乗……」

「死ねカス！」

またもキャッチボール不可の剛速球を投げつけた小夜子の一言を残して、無情にもエレベーターの扉は閉じ、階数表示が下がっていく。

椿姫も小夜子のことを止めてくれてもいいのにと思っていると、後腰の二刀がさえずり始めた。

『椿姫どのはまた一段と美しくなってたチュン』

『我らがボケ主とは雲泥の差だカア』

「ほっとけ」

あのままエレベーターに乗っても小夜子との喧嘩が勃発していたのは容易に想像できたため、これはこれで良しと思っていたが、十分以上もその場に待たされるとは思いもしなかった。

マンションの一階から五分ほど走ると戦場ヶ原学園の『外堀』に辿り着く。

江戸城跡地を利用して作られた戦場ヶ原学園は初等部から大学部まで無数の校舎が点在し、総生徒数が二十万人以上も在籍する巨大学園都市だ。

学園の巨大な敷地は高さ十メートルはある石垣と最大幅五十メートルの外堀が囲んでいるため、生徒は三十六見附を抜けなければ学園内に入ることは出来ない。

ちなみに見附とは堀に面した城門の前に小さな広場を設け、そこに見張りを立たせ不審者を「みつける」ことからついた名称だ。

いまでは見張りの代わりに教師やガードマンが見附に立って学生を出迎えている。

自宅から徒歩十五分というのは一番近い見附までの距離で、悠長に構えていては一番近くの四谷見附を通る頃には八時半を超えてしまふ。

そこから俺の通う大清水校舎までがまた遠く、出席をとりはじめる八時三十五分に到着するにはギリギリの距離だ。

十連続遅刻のために待っている恐ろしいアレを回避するには、経費削減のために弁当と水筒を持参する俺だが、痛い出費を覚悟してでも竹屋を呼ぶしかない。

「竹屋」

「竿だけ」

気の抜けたかけ声と共に外堀に浮かぶ何艘かの小舟のなかで一番近くの船が近づくと、俺は船頭の男に百円硬貨を放る。

船頭は百円を受け取ると代わりに十メートルはありそうな竿の先端をこちらに差し出してきた。

俺が立っている堀の幅は二十メートルと外堀の中では一番幅が狭く、この竹を使えば堀を飛び越えることも身体能力に自信のあるこの学生ならば可能だ。

竹竿を小脇に抱え、助走距離をとって外堀に向け全速力で走りだし、全身のバネをつかって大きく踏み切ると棒高跳びの要領で竹竿を堀へ突き立てた。

竹は適度にしまった後、元に戻ろうとする力が俺の体を浮かせ、反動が最大限になったところで手を離し石垣の上から垂らされたロープへとしがみつく。

周りを見れば同じようにロープにしがみつく生徒を多数見受けられるが、中には失敗して堀に落ちていく者も何人か見受けられた。

さらにこのロープにも必ずハズレが混ざっており、それを引いた学生が悔し紛れの罵声を上げながら堀へと転げ落ちていく。

竹屋の奴らがそいつらを回収して救助料を取るのが毎朝見ている光景のひとつなのだが、まったく大学部の奴らもうまい商売を考えやがる。

カミソリの入り込む隙間すらないと言わしめた江戸城の石垣を足場にロープを登りきると、本来あるはずの城壁は、俺の目の前にない。

代わりに植林された木々と、広すぎる学園の交通手段として建設された『外堀モノレール』が俺の頭上を通り抜けていく。

腕時計に目をやると長針は二十五分を指し、走っていけばなんとか間に合いそうだ。

石垣を登る際についた土埃を振り払い軽く走り出したところで、

頭上から低い女性の声が降り落ちてきた。

「十見十兵衛覚悟！！」

いつからそこで待っていたのか分からないが、大木の上から抜き身の太刀とともに白い羽織を纏ったセーラー服姿の女子学生が俺の頭上めがけて襲いかかってきたのだ。

「どわ！」

とつさに前転で攻撃を躲しつつ、スカートの中をチェックするのを忘れてはいけない。

風圧でめくれて容易に観察可能なスカートの中身は……。

なんてこった、スカートの中がスパッツだなんて邪道だろ！

女性の太刀が勢い余って地面へと突き刺さったため、抜くの到手間取った彼女と距離を取った俺は、襲われた怒りよりもその邪道さに憤慨し声を荒げながら言い放った。

「不意打ちするならスパッツ履くな！」

「この変態が！ それに不意打ちじゃない！ ちゃんとかけ声をかけた！」

「いや、頭上から襲ってくるのは不意打ち以外ないだろ」

「うるさい！ 貴様にそのような説教をされる覚えはない！」

「襲われてるんだから言わせてよ。えっと、君はたしか、佐藤珠代？」

「大橋蘭子だ！ 一字もあってないじゃないか！」

「そうだ、蘭子ちゃん。覚えてた。いやあ、ちよつとボケてみただけなんだ」

「息を吐くように嘘をつくな！ その様子ならなぜ襲われるかもわかってはおるまい」

「いいや、わかっている！ この十見十兵衛そこら辺のラノベ主人公のごとく鈍感な売りをするような性格ではない！」

自信満々で言い放つと、蘭子は少し顔を赤くしながらも切先を俺の顔に向けて構え、こちらの出方を待っていた。この反応は俺が十六年待ちにまっていたアレに違いない。

「俺に愛の告は」

「違うわボケえええ」

全部言い終わる前に蘭子が三連突きを放ち、間合いを一気につめてくる。

三回目の突きを躲し、彼女が大きく体勢を乱したところで大きく距離をとった。

「ちょ、待ちなよ！ 真剣だよ！？ 刺さったら死ぬよ？ 死ななくとも大けがだよ？」

「死ね！」

「待つて待つて！ いくらこの学園でも殺したら殺人罪になるのは知ってるでしょう。そんなに殺したいのなら決闘システムを使えばいいじゃないの」

「バーチャルリアリティによる決闘なんて、私の気が済まないのよ！」

「俺が何をした」

「見附以外の登校は罰則の対象だというのは貴様も知っているだろ」
「周りを見る！ 俺以外にもいっぱいいるじゃないか」

間合いを取りながら対峙する俺たちを余所に石垣に登り終えた学生達が走り抜けていく。彼らはこちらに軽く視線を寄越すが、自分達に火の粉が飛ぶのを恐れて完全に無視していた。

それもそのはずだ。

いま俺の目の前にいる大橋蘭子が着ている白い羽織の背中には恥ずかしげもなく大きな筆文字で「風紀」と書かれているのだ。

いまだき風紀委員つて。

笑われちゃいますよ。

学園物の定番中の定番、力をもった生徒会とか風紀委員と不良との対決とか。だが、その笑われそうな事がこの戦場ヶ原学園ではまかり通るのである。

高等部在校生だけでも五万人はいるこの学園では、光もあれば影もある。そんな学生の安否をただのモラルだとか良心とかに頼っているのは傷つく生徒は減りはしない。

いくら競争社会とはいえ、弱者を見捨てることが絶対ではないのだ。

「ほら、いまもあそこから！」

俺から目を離さず違反者を見ようとしないうちに蘭子に、わざわざ指さして現行犯を教えてやっているのに、彼女はそちらを振り向きもしない。

「見えない」

「ええ？」

「お前以外は見えないな」

「それって口説き文句！」

「違う！ 貴様は……。自分がやったことを忘れたか。三日前、お前は非番の私に対して……。こともあろうに大衆の面前でスカートを捲ったのだ！」

「え……。それだけのことで」

「それだけとは何だ！ あの恥辱をいまでも忘れない。しかもあの日に限ってスパッツをはいてなかった私はお気に入りの……。見られ……。」

「くまさんパンツ」

「言っなあ！」

蘭子は目に見えて顔を赤くしながら、剣技の片鱗も見えない大振りをしてくる。それを見切りながら、俺は自分の小太刀に手をかけハツタリをかます。

俺が武器に手をかけたことで蘭子も落ち着きを取り戻したのか、一定の間合いをとるとこちらの出方を伺いだした。

「大橋蘭子。俺のことを知っていて決闘をしかけているんだな？」

「もとより承知の上よ。噂のお前を倒せば学園での評価もあがるし、自分に注がれた恥辱を晴らすこともできる。この上ないわ！」

「なら秘密を教えてやる。俺が“無敗十傑”に祭り上げられていることとスカート捲りは密接に関係しているんだ！！」

「な……ん……だと？」

長さが三尺、重さは軽く見ても三キロ以上はありそうな大太刀を力任せに振り回していた蘭子は肩で息をしながら俺の言葉に耳を傾けようとしていた。ここで彼女を説得しなければ俺の命が危ない。

口からでまかせでも彼女が俺のことを畏怖すれば、逃げる隙からいできるはずだ。

「実は俺、未来がわかるんだ」

「は？」

「本当なんだ。あるものに書かれた予言をみることによって、未来に起こる事がわかるんだ。だからこそ俺は不意の襲撃を避けることができる、いまでも無敗を保っている」

「え？ それってまさか未来日記？ あるものって何よ。まさか携帯電話とか……」

「女の子のパンツ」

「やっぱり死ねえ！」

「なんでだよ！ 君が襲ってくることも俺は予知して……」
「お前がスカート捲りしてるからだろうが！」

そのまま大橋蘭子と仲良く朝のマラソンをし、教室についた俺の腕時計の針は八時五十分を指していた。

遅刻回数過多のため、四月二十日から二十七日までの間、

・ 亜城明

・ 十見十兵衛

・ 来海真一郎

以上三名を剃髪刑の指名手配に処する。

戦場ヶ原学園 高等部総合生徒会

放課後、高等部用総合掲示板に張り出された連絡事項の中に、自分の間抜け顔が載っている指名手配書を見つめ、思わずため息をついた。

来る者拒まず去る者逃がさずを校訓とするこの学園では遅刻が数百回になるうとも退学処分になることはない。しかし、寛大なるこの学園にも自分が犯した罪に対してそれなりの罰則が設けられている。

遅刻を連続十回すると丸刈りにされるのだが、問答無用で刈られるわけではない。

罪人にも反省する機会を与えられ、手配期間中学園に登校すること、学園内において十六時から二十時まで校内に留まること、その間に風紀委員に捕まらないことが条件だ。

さらに俺の場合指名手配を受けたのが致命的だった。

指名手配を受けた場合、高等部部活連までがここに参加してくる

のだ。

なぜここに部活という青春を謳歌している奴らが、ただか一生徒の罰則ごときに動くかといえば、学園の特殊なクラブ環境に理由がある。

戦場ヶ原学園は在学生の多さもあってか部活動が非常に盛んだ。

同じ学園ながら人気のあるサッカー部などは第一から第十三部まで存在し、当然のごとく部費が平等に分配されることなどない。強者がより多くの予算を勝ちとり、弱者は容赦なくカットされる。

部費という名の金に飢えた野獣のごとき部活愛好者にとって、指名手配者を捕らえることは賞金という名の予算が上乘せされるため、この機会を逃すものはいない。

八回遅刻した後は普通に登校し指名手配になることを避けていた俺にとつて、このような結果になったのは非常に状況だということだ。

明日から待っている憂鬱な指名手配期間を思うと、部活へ向かう足取りは重く今日は帰りがかったが、部長という職責をまとうするために向かうことにする。

俺が所属する部は半蔵門の方にあるため、その道すがら第一女子サッカー部、第七女子バレーボール部、第三女子ソフト部、第五女子陸上部の練習風景を堪能し、さらにランニング中の女子大第四テニスサークルの後について五キロほど走ると、ほどよく我が愛しの第零茶道部のプレハブ小屋が見えてきた。

内堀に面した場所に建てられた部室は、蔭に被われ一見周りの木々と同化し、樹木のなかに部室があるような錯覚すらおこす。

引き戸を開けると室内は薄暗く、八畳ほどの作法室は古い畳と日向のにおいがした。

明かり取りのための障子窓を開け放ち外気を取り込むと、床の間の側に積み上げられた座布団を一枚つかみ取る。

綿がほとんど入っていない薄っぺらい座布団を丸めて枕がわりにし、部屋の中央で寝転ぶと携帯端末を取り出すと、今日の部員参加状況をチェックしはじめる。

これが俺の部活動のスタートであり、部長としての職務だ。

件名：あにみ

本文：部長、本日見たいアニメがあるため休むでござる by村田

件名：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：Re：今日とする

本文：いつもどおりっす あみ

件名：ばかだろ（笑）

本文：あはは、おまえなに指名手配処分くらってるの？ 馬鹿じ

やない 織部

幽霊部員はいつものごとく来る気配のないメールをよこしてくる。メールしてくるだけ偉いなと思った俺は部長失格か。

畳があつて寝っ転がれて部費でお茶とお菓子が食えるからいいなと思う程度で入った茶道部は入部した一週間後には俺ともう一人を残して全員いなくなってしまった。

理由はただの喧嘩だ。

気ままな理由で叩いた部活への入部先にいたものは反吐がでるほどの悪党のたまり場で、その日から先輩の方々との対決が始まった。一週間ほどの死闘とも言える争いは俺たちの勝利に終わりはしたが、追い出した連中と学園内で会えば、五秒で火がつくほど関係は悪化したままなのが俺の日常を愁いている。

三十人はいた部員が抜け、いまでは俺が部長となりもう一人の部員と五人いなければ部として認められない理由から帰宅部三人を捕まえ、なんとか存続している。

何とはなしに考え事をしていると、扉を開けるカラカラと乾いた音が静かな室内に響いた。

「ジュジュ今日は早いね。いつもなら第二女子新体操部を見にいつてる頃なのに」

「今日は遠征で体操部はいないのだよ」

「さっすがジュジュ。全女子クラブのスケジュールを把握してるだけのことはあるね」

「なあ、いい加減俺たちも高校生だ。ジュジュって呼び方を変えてもいいんじゃないか」

「えゝ、ボクにとってはジュジュはジュジュだし」

俺をジュジュと呼ぶのは、唯一の正式部員にして我が信頼すべき副部長の如月真だ。

夕日に照らされたシルエットに浮かび上がった姿は、私服登校が認められているにも関わらず、きっちりとした詰襟学生服を着込んでいる。

まあ、俺も毎日変える私服が面倒なため学生服登校をしているが。ただし、俺と違って真の学生服はまじめな生徒というイメージとは真逆で上着の着丈が思い切り短い、一昔前に『短ラン』と呼ばれていたものを愛用している。

いまの時代に変形学生服を着用している人間は応援団くらいで、いまどきの不良と呼ばれる輩は存在すら知らないのではないだろうか。

小柄ながらも非常にバランスの取れた長い手足とキリッとした目元、鼻筋の通った凛々しい顔立ちに時代遅れの格好は、どこかで昔の不良映画の撮影をしているのではないかと常に周りから好奇心視線に晒されている。

これで髪型がリーゼントなら完璧な時代錯誤者なのだが、髪型はいたって普通のショートボブで、いつも男の子に間違われる真は正

真正銘の女の子だ。

真の特徴をもう一点上げるとすれば、彼女の左手に握られた長巻だろう。

真の神器、愛刀『紅孔雀』。

刃渡り三尺、柄が四尺と一見薙刀や槍と間違わそうなほど柄が長いこの武具は列記とした刀に分類される。

紅孔雀はその名の通り柄も鞘も紅色をしており、柄巻と呼ばれる柄に巻かれた糸が玉虫織りという贅沢仕様で、照らされる光や角度によって色が変わる様は、まるで孔雀の羽のようだ。

「何をそんなに見つめてるんだい。さてはボクに惚れたか？」

「前から惚れているよ」

「冗談だつたら殺すよ」

「殺される！」

入り口に立つ真と部屋の中央にいる俺との距離はざつと二メートル。真の手が霞むと背筋も凍りつかせるような殺気が全身をなめまわし、瞬間、勝手に動いた俺の体は壁際まで退避していた。

張り付くように壁に背をつけた俺の視界に写っているものは、先ほどまで寝転がっていた位置に紅孔雀が刺さっている光景だ。

「ちえゝ。外しちゃった」

かわいらしい言葉とは裏腹に真の表情は凄惨な笑みを浮かべていた。

「怖いわ！ なに？ 俺を殺す気！？」

「冗談言うから」

「俺らつて冗談も言えない間柄なの！？」

「ふん」

突き刺さった紅孔雀を抜き、むき出しの刃を鞘にしまい込む。

見る人がみれば可愛い行動なのかな、これ。

勘違いしやすい俺は真が俺に惚れていると思っていた時期もあったが、こいつには列記とした許嫁がいるんだよね。

かなりイケメンの大学生の許嫁が。

「それよりいいのジユジユ。今日って予算会議じゃないの？」

「忘れてた！」

慌てて靴をはいた俺は、部活の予算を決定している高等部総合生徒会へと駆けだした。

天下御免の印籠

四月というのは各クラブにとって命運を分けるだいじな期間だ。うるさい先輩がいなくなり最高学年になったばかりの新三年生、ようやく雑用から解放され喜びに打ち震える新二年生たちが、新しい学年にあがったとれたてピチピチの新入生を刈り取る場、それが四月なのだ。

中学からエスカレーター式に上がってきた者は事情を知っているが、余所から来た新一年生は、食虫植物のように待ち受ける先輩達の甘い誘い文句とやさしい仮面に騙され、その魔手に捕らわれていく。

先輩達による説明会は戦場ヶ原学園の風物詩のようにあちこちで見かけ、上級生は仮入部期間が過ぎるのを土中にいる蝉のように堪え忍ぶ。そして、本入部になった途端、偽りの仮面をかなぐり捨てさり、その本性を現す。

あちこちの部室や運動場から聞こえる阿鼻叫喚を第二の風物詩に学園の四月半ばが過ぎる頃、予算編成という名の試練が各クラブに降りかかる。

昨年の実績と新しく入った新入生を生徒会が査定して予算が組まれる、予算会議という名の合戦が始まるのだ。

俺と真は半蔵門を抜け、走って五分ほどの距離にある予算会議が行われている総合生徒会本部へと入っていった。

六十階建ての本部一階にある待合室は予算編成を待つ部長や部員で溢れかえり、俺と真は人混みを縫うようにして受付まで辿り着くと、すでに他の茶道部の面々が会議室に集合して予算編成の話し合いが始まっていると告げられた。

「出遅れたか。どうすつかな」

「まだ始まったばかりみたいだし、すこしでも交渉しようよ」

真の言葉もあり、受付に案内されて会議室の扉をあけると、その場にいた各茶道部代表の鋭い視線が俺たちに突き刺さる。

普段なら大歓迎の熱視線も今回ばかりは御免被りたいほどの痛い視線だ。

対面式に配置された二列の長机には入り口を手前として奥側に第一生徒会の面々、そしてこの場の誰よりも美しい総合生徒会副会長の椿姫がいた。

「よお、椿姫」

向かい側に座る椿姫に挨拶をすると、彼女は軽く微笑みを返してくれる。

「遅刻してきた上に進行を遅らせる行為は慎んでいただきたいですねえ」

「げつ。ヒキガエルもいたのか」

「だれがヒキガエルだ！ この年中色情魔が」

俺へ嫌味を投げつけてきたのは、高等部二年生第一生徒会会長、響鬼渡。

学園の中でも一、二を争うほど椿姫ファンを自称する響鬼は、中学生時代のある日に隠し撮りしてた。

誰をつて、もちろん椿姫をである。

なぜそのことを知っているかと言えば、俺もその隠し撮りポイントに潜んでいたからであり、その場所とは真夏のプールが観測できる場所であり、目的はもちろん椿姫の水着姿であった。

俺と奴との違いは椿姫の成長過程を心という名の媒体に記憶するのか、実用的に電子媒体に記憶するかの違いだろう。

俺が入学以来一年の月日を費やして探し出した狩場で鉢合わせした響鬼に、幸せは分かち合うべきだという力説が通じたのか、奴は涙を流しながら俺にデータを差し出してきたのである。そのとき響鬼は気絶していたが、そんなことは知ったことでは無い。

だが、“なぜか”噂はあつという間に広まり、椿姫本人がそのことを知るのに時間はさほど必要なく、見つかった俺は、

「このデータは全男子生徒の宝だ！ ワンピースだ！ このデータを預けられるのは君しかない。全てを君に託す」

涙ながらに訴える響鬼に、そこまで言われては断ることは出来なかった、と全ての罪を響鬼になすりつけたのである。

響鬼自身が隠し撮りをしていたことは事実だったし。

椿姫に居合胴抜きを打ち込まれ、肋にヒビを入られた俺と、椿姫の背負い投げによって無様にも「ゲコツ」と鳴いた響鬼のどちらが不幸だったのだろうか。

それ以来、俺は響鬼をヒキガエルと呼び、あいつは俺を親の仇とばかりに憎んでいる。

当時の真にそのことを語ると、「隠し撮りもどうかと思うけど、逆恨みでもないと思うよ」だそうだ。俺にとっては女性以外の恨みは全て逆恨みと受け取るんだが。

「みなさん、ゴミカスが邪魔をしてすいません」

「あんだと！？」

「十兵衛。め！」

吐き捨てるような響鬼の言葉と、その隣に座る椿姫の『め！』の

対比はすさまじく、言い返す気力もなくなった俺は大人しく椅子に座ることにした。

響鬼もそれにやられたらしく、俺への嫌味口撃もやめて椿姫を見つめて薄汚いニヤケ面を晒している。

その光景をみていた真が俺へと向きなおり、

「ジュジュ、め！」

「め？ 目がどうし……、ぐお、目があ目があ……！」

真に目突きされた。

危険だよ！ 失明したらどうするの！

訳もわからずふてくされる真を余所に、その光景を見ていた響鬼は我に返ったのか議題を進め始めた。

「あゝ、話を進めます。茶道部筆頭の千家、裏千家にはそれぞれ予算を五百万ほど、それ以外のクラブは三十万ほど用意しています」

「おお。真、聞いたか？ 予算三十万だってよ。けっこう用意してるじゃん」

「零部は予算ゼロだ」

「んだと！？ このヒキガエル野郎、私情を挟んで仕返したあ根性ひんまがりすぎだろ」

「誰がヒキガエルだ！ それに私情など挟んでおらん。査定の結果こうなったんだ」

「どう査定したらウチがゼロになるんだ」

「お前の存在自体がマイナスなんだよ！ 学園の恥さらしが」

「ああ！？」

「まあまあ、落ち着きなよジュジュ」

机を飛び超えて殴りかかろうとする俺の腰にしがみついた真は、俺に代わりヒキガエルに質問する。

「なぜウチだけゼロなんです。部として存続している以上、最低予算は付くはずだけど」

「それは私から説明させていただきます」

隣に座っていた椿姫が立ち上がり、俺の方へとやわらかな視線を向けてくる。ヒキガエル相手ならいくらでも喧嘩を買うが、さすがに椿姫相手ではそれもできず黙って説明を待つことにした。

「予算の決め方ですが部員一人につき千円から五千円の予算がつきます。そこに去年の部活動としての実績を加味して査定が行われるのです」

「それだとしても五人からなる部なら最低五千はつくはずだよ」

「そのとおりです。でも零部は実質十兵衛と如月さんの二人で、他の三人が幽霊部員だというのは調べがついているの。でも、活動がどうであれ、部として存続している以上、あなたが言うように予算はつくわ。問題は去年の実績よ」

「去年の実績と言われても先輩方は引退されたし、よくわからんな」

椿姫と真の間に入って俺はつぶやいた。いなくなった人間の実績を考慮されても困る。

「引退じゃないだろ！ 貴様がたたき出したんだろうが！」

「うっせ、ヒキガエルはゲコゲコ言ってる。俺は椿姫と話してるんだよ」

「貴様なんぞと神導さんが話すこと自体が美に対する冒瀆なのだよ」

「俺は歩く汚物か！」

「それ以外どう表現していいかわからんね」

「二人とも止めなさい！」

机を挟んでにらみ合う俺らの仲裁に入りつつ、椿姫はため息をついた。

「十兵衛は知ってるでしょ。旧零部が何をしていたか。恐喝や強請は当たり前、時には暴力による略奪すらおこなっていたの。本当なら今年度に零部は廃部を言い渡されるはずだったのよ」

「だから追い出した実績を買って百万ぐらいくれてもいいだろ」
「お前の存在がマイナスだと言っただろ！」

ヒキガエルが唾を飛ばしながら身を乗り出してきた。

「追い出したのは良いとして、その後のお前による女子更衣室などの覗き行為、女子生徒に対する猥褻行為、あまつさえ女子教員（若い人ばかり）にも手を出すなど言語道断！」

「猥褻とか言われると卑猥すぎるだろ。ただのスカート捲りという健全な競技のトレーニングなんですよ。しかも最近ガードが高くてみんなスパツ履いてるし」

「そんな競技ない！ この破廉恥者が！」

「先生！ 隠し撮りは破廉恥じゃないんですかぁ」

「隠し撮りなんぞしていない！ 私は美の追究をしていたただけだ。美しい花々や風景をとることが隠し撮りになるのかね」

「椿姫聞いたか？ お前って風景と一緒になんて、人間的にはぜんぜん好きじゃないってさ」

「誰が好きじゃないと言った！ この世の誰よりも……って何を言わすか！」

「何を言い出すんだ。この変態ヒキガエルが」
「やめなさい！！」

耳を劈く椿姫の一喝が部屋中に響く。

「放っておくとすぐに喧嘩をはじめるんだから。会議が進まないでしょ」

「す、すみません」

「議長も言っていたけど、十兵衛の素行不良が予算カットの原因なの。これに懲りたら変な行動はお止めなさい」

「え、俺の生き甲斐なのに」

「別な生き甲斐を見つけないさい」

「んじゃあ、椿姫のスカート捲りに心血を注ぐ！」

「別の事に心血を注ぎなさい！ それに私ので良かったらいつでもどうぞ」

「まじでか！」

「捲れるものならね。捲った瞬間にあなたの腕が斬られてもいいのならいつでもどうぞ」

椿姫なら本当にやるから怖いよ。

「ジュジュ、もうやめなよ。ジュジュが変態行動を止めるわけないんだし」

「真くうくん、どーいうことお」

「君は根っからのスケベなんだし、スケベ君。君はスケベ。スケベさを取ったらジュジュじゃなくなるじゃんか」

「お前は俺をそーいう目で見ていたんですね！ だいたい男たるものの全体の八割はスケベかむつつりスケベなんだよ」

「残った二割が気になるよ」

「一割が変態であり、残り一割はそれ以外だ。なあ響鬼先輩」

「ああ、その通りだな……って何言わすんだ！ 私はそんなこと知らん！」

「変態王である響鬼先輩も認めてくれたことだし、それが男なのだよ真くん」

「はあ。もういいよ。とにかくジユジユが更正することはないんだね。それにこの予算編成で決まった額がそのまま一年続くわけじゃないし」

真が放った言葉でこの場の雰囲気ガラリと変わる。

千家、裏千家、他クラブの部長達はお互いを牽制し合い、会議室は緊張感に包まれた。

そう、この場で決まった予算など暫定でしかないのだ。

本当の予算を決める戦いはこの後に待ち受けている。

「零部にはボクとジユジユの“無敗十傑”が二人もいるんだよ。予算なんて奪えばいい」

「聞き捨てなりませんね、如月さん」

今まで俺らの会話を黙って聞いていた茶道部千家部長が真へ向き直る。

「私たちが黙ってあなた方に予算を明け渡すとても？」

「別に叫びながらでもいいよ」

「ちよつと調子に乗りすぎじゃありませんこと。いくら決闘システムが常識とは言え、私たちが黙って勝負を受け入れるとお思いなの？」

「君達がボクらの勝負を受ける受けないは自由さ。怖いなら逃げればいい」

「なんですって！」

「おい、やめる真」

千家部長は立ち上がり今にもこちらに迫ってきそうな勢いだ。それに比べて真は脚を机になげだし、パイプ椅子の後ろだけでバランスをとるよう座っている。

その態度がさらに相手を挑発し、千家部長が神器に手をかけるのを待ち構えているようにも受け取れた。

でした。これが予算編成の第二の陣。

弱肉強食が当たり前の戦場ヶ原学園では、生徒会に決められた予算は不変ではない。

四月二十日から三十日までの間に限り、相手との合意が得られれば勝負事により、奪い合うことができる。

勝負形式は何でも有り。

野球部だからといって野球で勝負するわけではなく、カラオケだろうが、ダーツだろうがなんでもいい。

それが例え神器をつかった真剣勝負だとしても。

まあ、戦場ヶ原学園とはいえ真剣勝負は御法度なんだけどね。風紀委員もすぐに飛んでくるし。

こういった校風があるから、この学園に通う生徒は血の気が多いと言われるんだ。

「ええい、やめんか君たち！　ここは予算を決める場であり、奪い合う場ではない！」

緊迫した空気を破ったヒキガエルはさらに続ける。

「奪うのなら零部から部室を奪うとかそついったことにしておきたまえ」

「なんでだよ！」

「我ながら名案だと自負している」

「お前は自刎して死ね」

お互いに無言で机を乗り越えたと胸ぐらをつかみ合った。

「ムシケラにせめて人間様への態度を教えてやる」

「そらどうも。ぜひ良い隠し撮りポイントをご教示いただきたい」
「やめなさい！」

取っ組み合いを開始する俺らを引き離そうと椿姫が間に入ってくると、ヒキガエルはすぐに手を離すが、俺に言わせれば何が学園一の椿姫ファンかと笑いがこみ上げるほど滑稽な姿にうつるね。

椿姫は性格上、異常にパーソナルスペースの警戒心が強く、ここまで接近を許すことなど滅多にないのだ。

この機会を生かさない奴が椿姫ファンを名乗るなど甚だおかしくてヘソが茶道部、もとい茶をわかすってなもんだ。

響鬼をあざ笑いながら、俺はあくまでも椿姫に引き離された演技をしながら、右手を椿姫の胸元に移動させる。この時に決して視線を目的地に動かしてはならない。

女性の胸をチラ見する男子諸君、彼女たちはその視線移動を決して見逃していないと忠告しておこう。

彼女たちはハンティング“される”か弱い生き物ではなく、ハンティング“させている”狩人なのだ。

あくまでも、手は自然に置きにいく。

触るのではない、置いた手の先に胸が飛び込んでくるようにする、これ大事。

柔らかい感触がその手に飛び込んで俺がニヤケるのと、椿姫の顔が赤くなるのと、響鬼が青ざめるのはほぼ同時だった。

「ふむ。やっぱり成長しているな」

ぽそつと感想を漏らすと、椿姫の腰元で『ちりん』と鈴の音が鳴った。

やばい！

この鈴の音は朝方聞いた物とはまったく別の意味合いを成す。椿姫の『赤鈴』が鈴の音を鳴らすもう一つの意味合いは、殺気を込めた一撃が発動する時！

極上の感覚を寸秒も楽しめず、一瞬にして総毛立つほどの殺気が首元を薙いだのはその鈴の音と同時だった。

『赤鈴』がその殺気を追って俺の首元にくるのは火を見るよりも明らかであり、この距離から椿姫の居合いを躲すのは不可能だ。ならば……死なば諸共、どうせ死ぬならその胸の中で死なせてくれ。

椿姫へ飛びつく意表を突いた俺の行動に、彼女はとっさに防御ができず、そのまま二人して倒れ込む。

もちろん俺はすばやく自分の体を床と椿姫の間に割り込ませ、クッション代わりになったけど。

「ききき、貴様あ！」

「ジュジュ！」

床に倒れ込んだ俺の上に椿姫が重なるように乗っかっているのを幸いに、思い切り抱きつこうとする暇もなく、真とヒキガエルが俺と椿姫を引きはがした。

引き離された瞬間に居合いが炸裂するかと警戒したが、椿姫の勘気は逸れたのか彼女はだまってスカートの裾を直していた。

「もう黙っていられん！ 貴様のような奴は大海よりも広い心の持ち主である私が許しても天が揺るさん！」

「天も狭くなつたな」

「零部は廃部にする！」

「お前の権限でそこまではできないだろ」

「黙れ黙れ！　これが目に入らぬか！」

響鬼は胸の内ポケットから印籠を取り出すと目の前に高々と掲げた。

別にこの印籠には某時代劇でお馴染みの三つ葉葵の紋所があるわけもなく、代わりに金字で『天』と書かれている。いや実際は『天』だけではなく他の語句が続くのだが、響鬼の持ち方が変なのか、右手に握りしめられた印籠の上の部分しか露出していないため、『天』だけが見えている状況だ。だが、この印籠こそ戦場ヶ原学園では絶大な効果を及ぼす『天下御免』の印籠ということはみんな知っていた。

この印籠を持つ者は学園内において、どんな望みも叶えることができるドラゴンボールのような存在と伝えられ、絶大な力を持っていたと言われる先代総合生徒会会長が所持し、彼の卒業と共に消えた。

その印籠がこいつの手にあったとは。

「控え居ろう！　これこそ『天下御免』の印籠なるぞ。頭が高い！」

「ははあゝ。……って誰が控えるか！　ヒキガエル、それをどうした！」

「ふ、俺の功績を認めてくれた先代総合生徒会会長が俺に託したのだ」

「嘘をつくな嘘を」

「嘘ではない！　今この手にあるのが何よりの証拠だ！」

「見せてみる」

「お前の目は節穴か。今こうして見せているであらう」

「そうじゃない。お前が握りしめている下の部分も見せてみると言っている」

「ななな、何を。貴様がごとき俗物がこの印籠の一部でも見られたことを光栄に思え。それだけで十分だ」

「い・い・か・ら！」

下郎がとかわけのわからない叫び声をあげる響鬼を押さえつけ、真がその手から奪い取ると、印籠の上の部分だけがその手にあった。印籠とは小物や薬を所持するための容器のことで、印籠自体は三つから五つほどに分割出来る構造となっている。それを両端に通す紐でまとめ上げ一つの形となすのだが、響鬼が持っていたのはその上の部分だけだったようだ。

「下の部分はどうしたよ」

「ななな、なんのことかな」

恥ずかしいほどに目を泳がす響鬼はせわしなく手を組んだり顔をかいたりと動揺していることをアピールしまくりだ。

「天下御免の印籠は印籠という形を取ってこそ効力をなす。学園に伝わる言葉だよな」

「ふん！ この印籠は例え一部分であろうとも効力をなすのだよ！ もともと部としても存続していること自体が怪しい貴様らのところなど無くなって当然だ。返したまえ！」

真が弄んでいた印籠の一部を取り返した響鬼は強気な態度に出てきた。

「へえ、それって一部分でも効力発揮するんだあ」

自分の手中から簡単に印籠の一部を取られた真はその瞳に冷徹な光を宿し響鬼を見据え、何やら自分の懐へと手をやった。

「ならボクも願っちゃお！ 零部に部費一千万を要求する！」

真が懐から手を出すとそこには黒漆塗りされた木片が納まっており、それには『下』と書かれていた。

「ええええ、真、おま、それ！」

「いやあ、これ拾ったんだけど何かわからなくて取っておいたんだよね。作りから値打ち物かとも思ってたさ」

「さすが真くん！ 何かしてくれると思ってた」

「もつと褒めて良いよ」

口をパクパクとさせている響鬼を尻目に俺らがハシャギまくると、

「しゃくくくくくくく！ 貴様らが持っている物など偽物にすぎん！ そんなもので天下御免など笑わせてくれるわ！」

「お前の持っているのだって偽物かもしれんだろ」

「私のは本物だ」

「証拠を見せてみる」

貴様こそ見せてみると、言い合いが小学生レベルにまで低くなつた頃合いを見て、赤鈴の刃が俺らの前に突き出された。

「いい加減にしないで。どっちみちその印籠が偽物でも本物でも全部揃ってないのなら効力は発揮しません」

「しかしだね、神導くん、私は君のためを思ってたね」

「私のためを思つたのなら、どうかこの場は穏便にすませて会議を進めてください」

シユンと縮こまるヒキガエルを笑い飛ばそうとしたところに、刃をこちらに向けた椿姫がニコリと笑う。

「十兵衛もいい加減にしないと本気で怒るわよ？」

君子は危ういときに騒ぎを起こさずだ。

その後は黙って議題が進むのに任せて会議は解散となり、零部の予算はゼロと決まった。

長引いた会議にうんざりしたのか他の茶道部はそそくさと会議室を後にし、生徒会もそれに続く。

扉を抜けようとする響鬼に向けて俺は忠告めいた事を発した。

「響鬼先輩よ。その印籠の一部が偽物であれ本物であれ気をつけた方がいいぜ」

「は、脅しとは下賤な人間にふさわしい発言だな」

「おいおい、俺は親切で言ってるだけ。先代以降紛失したと言われていた印籠の一部を持っている奴がいる。こんな情報が出回ったら獲物に群がる人間がこの学園にどれだけいると思ってるの」「私が襲われるとでも？ 貴様に心配されるようじゃ私もお仕舞いだ。忘れたのかね、私も“無敗十傑”の一人なのだよ」

「“元”でしょ」

「う、うるさい！ とにかく私から奪えるというのなら奪っていけば良い。この学園の門を潜り抜けた者にはそれなりの覚悟がある」

「“裏部会”が動いたとしても、そんな悠長なことが言えるんですかねえ」

「“裏部会”が！？ ふ、ふん。私はそんなことで動いたりせんぞ。君と話しているのは本当に不愉快だ。これ以上何も語ることはない！ 失礼する」

せつかく滅多にしない男への忠告を無視して響鬼は退室していった。

残った生徒会の面々も響鬼の後に続き、最後に椿姫が扉を抜けようとしたところで、俺の方に向き直る。

「十兵衛、“裏部会”の話は本当なの？」

「椿姫、お前も印籠の噂については色々聞いたことがあるだろ？
話こそ尾ヒレがついてドラゴンボールのような扱いになってるが、
結局のところアレは権力の象徴にされてるだけだ。それを見逃す奴
らじゃないね」

「それが本当なら風紀委員が黙っていないはずよ」

「そうだといいいけどな」

それ以上椿姫は何も言わず場を後にした。

残った俺と真は彼らの足音が消えるのを待って会議室を出る。ま
た出くわすと他にも因縁つけられそうだし。

「ジュジュ、ヒキガエルが狙われるってことはボクも狙われるって
ことじゃない？」

「そうだな。ま、そこはいざとなったら何とかするわ」

「かつこいゝ。頼りになるね」

「まったく響鬼のアホが。争乱の元になりそうなものを振りかざす
とは。ああいったものは、こっそりと持つものだ」

「いいじゃない、争乱！ 中学校の時や零部の先輩方とやったみた
いなのがあるかと思うとワクワクしてくるね」

まったく。

真も中学時代に出会った時よりだいぶ丸くなったと思っていただけ、
中身は変わってないらしい。

明日からの指名手配期間、きつと起こるであろう部費争奪戦、天
下御免の印籠、考えるだけで争乱の種は埋まりまくりだ。

真の足取りは軽く、俺の足取りは重く、今日は帰宅することにし
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5282y/>

学園刀争記

2011年11月29日17時48分発行